CATALOGACIÓN: Álbum de grabados nº8
Signatura: J-C/7

Artista principal: UTAGAWA YOSHIIKU
Fechas: 1867
Tema principal:
- *Musha-e* (Guerreros)
Nº de estampas: 82

No 1151

太平記英勇傳
森三左衛門可成
信長の合戦信治を補て江州伍和山を在り
浅井朝倉石山の門徒の通軍合て九十有余二陣の小勢寄る城中殊の小勢
色うく城外は討て出敵数多討取て終に踏上来とも甚うう
寿房亭
朝霧楼芳幾画
廣幸
七十六

山全亭有人記
一惠齋芳幾筆
廣幸
太平記英勇傳
竹中半兵衛重治
濃州の住人齋藤の麾下うう信長美濃を保呑ばさんとすれど重治有つて諫めうしば後國を辞して山林に遁れ閑をたのしむ秀吉住く治乱を論ト意に説て軍師とう重治得知く言ざることをうく意を授しく秀吉ぞうまけ功を累ること少うしば天正五年秀吉と俱に中國に赴り播備二州を定め同じき七年三木の陣中に於く病に臥て京に帰つて醫療を素意とする妻子を重治のうく家故地に死うんとふうくば陣中に結く死せう秀吉憐て孤子重門を撫育一後三万石を賜ひ丹後守に任ぜ
七

山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
太平記英勇傳
加藤左馬之介嘉明
三州岩崎の住人加藤嘉明の男秀吉に仕えて軍功かぞへるに遑なし賤ヶ嶽の後井吉兵衛を肇取後天正十四年仙石秀久と俱に九州に使者となり秀久の軍を破て志戸津家久を
長曾我部信親以下多く討死
朝鮮唐島の船軍に歌船数十艘乘取陸に清正行長を第一とし海に嘉明を第一といふ
太平記英勇傳
貴田孫兵衛統治
豊前の國彦山の禁毛谷村の農夫怪力無双にして剣道に達し豊公召ぬに統治の曰く自己に神の告あり力量増し者の臣下とならん是ふおいなく小倉の御陣に諸将より勇士を以て統治と角觝を做せに木村又兵衛の為に後色とう遂ふ加藤清正の臣となる後朝鮮
コランカイ入て森本と先登と手柄を抜駆して敵の先将を討とり
その身金鉄
多勢のうちに
討死す一名を
後代に
寿亭有人紀
朝霧楼芳幾画
廣幸
六十四
三十九
Biblioteca

太平記英勇傳
高山右近友祥
山企亭有人記
一惠齋芳幾筆
長曾我部弥三郎信親
太平記英勇傳
七十二

山全亭有人記
一惠齋芳幾筆
太平記英勇傳
筒井陽舜坊順慶
太平記英勇傳
櫻井佐吉
寺尾亭有人紀
朝家横芳幾画
十一
四十二

太平記英勇傳
松田尾張守
小田原北条家
第一の老臣和勇
長子笠原新八郎と謀
主家を倒潰して駿左
八州を掌握さんと
會々坂部岡江雪
秀吉と和を進めしを
松田さらに戦を企て
味方屢々利ならざれ今八
小田原城に迫る松田父子
時を期をうかがい堀秀政に侍
反忠信をすすめ三男左馬介
誠忠に辞世を後秀吉に
遂を憎んで誅をくわえぬ
寿亭有人紀
朝霞楊芳幾画
十八
太平記英勇傳
松下加兵衛之綱
山全亭有人記
十九
一恵齋芳幾筆
今川家の旗士秀吉はじめ光
之綱に仕え初陣をつとめ
北条の先将伊東日向守
と討とのうち義元大に
賞ありて秀吉に
其沙駄色瑙
於て秀吉駿州
せたる之綱し
又義元のもとへ
意とせられば義
元陣没の後ハ
氏真に扶を浪人して
清貧をくらしと晩年天正
十七年秀吉小田原戦陣の
刺をめして丹州舞坂をうつ

太平記英勇傳
武田勝頼
伊奈四郎と号し信玄遺命
あらく勝頼の子太郎信勝
を家嗣とす
勝頼とて
國主や主
猛比う
とりくらる
性昏愚はじて
邪を信じ正を
疎し
時の福島の城主
木曾義昌勝頼をうらんで
安土の内通を信長大軍を率く
信州に乱入し数城を降す勝頼新府に入て
先遣んを議を信勝勝頼を今亡ぶべき國つゝ
遁て何國へ往のゝ唯死て
四十余人勝頼を
恵を
寿亭有人紀
朝霧横芳画
八
太平記英勇傳
安田作兵衛國次
光秀中國援兵と
号して本國を出神
洛桂川の辺に至り作兵衛
國次とて
寿亭有人紀
朝霧横芳画

太平記英勇傳
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
明智日向守光秀
齋藤代八郎利次
太平記英勇傳
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆

太平記英勇傳
山名助時幸入道道鬼齋
山全亭有人記
一惠齋芳幾筆
廣筆
六十七
太平記英勇傳
佐く陸奥守成政
成政武勇をつのりて越中の賊を敗く王命を稱さん豊公十万ふ
降参し九州攻の功有を以く
政所傍ようろうして肥後一國を
賜ふ成政恩ふ感しを
黒き百合を献を政所
奇也とし淀殿を請て茶會
を催さんとし淀どの其設
を聞知人をして黒百合を
取寄しを政所ハ成政が仕業
うんと思ひ憚にしをく
誅し一揆の鎮ざるを罪
とし死をゆひて斷絶せり
五十六
寿乃亭有人紀
芳幾画廣筆

太平記英勇傳
豐臣秀吉公
父を弥右衛門と号し初名日吉後に筑成長く藤吉と更む永禄元年秋九月信長に仕えそうろう同じき十一年出て持校に列し丹羽柴田を統武と慕ひて羽柴と改め人下日に昇て登庸し遂に四海を掌握して宮位人臣の極に超る
諸侯の恩賞完行あり不足とせ三韓屬國のえを失ふを名とし將に今てを代そう辭するに勅して豊國大明神と号とたまう
慶長四年歳十一月
朝家拾芳幾重
山全亭有人記
一惠齋芳幾

太平記英勇傳
淺井備前守長政
世々近江の國主京極家の臣祖父亮政國を掠奪して西近江を一城を築く長政は曾祖父を越前國を許婚を信長に長政妹を送つて親を通せ
かど久政義にうつく義景を尋ね信長と干戈を交えんと議す子として父を反くの道なく且戰ひ且破れて家室三女を信長に返し助命の使者三度に及べど唯專志その謝して自殺せり
山全亭有人記
一惠齋芳幾

太平記英勇傳
千石權兵衛秀久
豊臣家隨一の強勇秀吉
四國を伐まふ諸將を
三隊ふ分ち秀久の
讃岐より入へ前軍ふ
進んで諸城を拔き
四國平定做ふ及んで
讃州を賜ふ會々九州の
義久我意ふ任のりく
王命を拜さず故ふ秀
久使者として其罪を
問をふ義久怒て秀吉を
罵る秀久安治義明と俱ふ
義久と戰ひ利あらずして豐後ふ
走る秀吉其怠慢を責て邑を奪ひ尾藤
知定ふ予了ると小田原陣ふ功ありを以て信州
小室ふ地をゆ〳〵五万石を領せり
寿亭有人紀
朝霧樓芳幾画
九十八
太平記英勇傳
北條左京大夫氏康
左京兆氏綱の嫡男祖父早雲
三世相傳て其門を高うを紀中
氏康武勇業果祖父ふ增り
ゴ万ゥ四千の小勢を以て両上杉
四万の大軍ふ勝くたりを
制ゆ竟ふ朝定をうち
富政を追ふく關左
八州を掌握
兵威衛全に
振ふ武勇の列將
和哥をこのんで秀詠多ゥ成年の
後高樓に登りて涼風を待て實
城北ふ眺のみをく愛ふ
臣等眉をひそめ不評を忌む
氏康取敢ず一首の和歌を
ふんの我ふ欲くる方に死ーたりとも
寿亭有人紀 貳 朝霧樓芳幾画

太平記英勇傳
明石儀太夫秀基
儀太夫ハ光秀の臣なり四王天但馬と
ともに命を奉して危ケ嶽より
埋伏し秀吉中國より
赴くを待ちて討んとするに
黒田孝高もし光秀の
臣等おむくゝ
四王天ハ清正の為ゆゑ
今ハ討死と覚悟
相続
主君秀吉が生死を
京にいろう光秀に
辞世一首
自殺
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
太平記英勇傳
鈴木飛騨守重幸
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
四十五

太平記英勇傳
井上大九郎
寺子屋人紀
朝霧楊芳画
六十
太平記英勇傳
和田伊賀守惟政
寺子屋人紀
朝霧楊芳画
十六

寿亭亭有人紀　朝霧横芳画　廣幸

太平記英勇傳
鈴木
豊人
▲後筒井の勇臣小林團蔵と戰ひ仏力を以て小林を討取
寿亭春人紀
九十
朝霧楼芳光画
廣重
太平記英勇傳
亀田大隅
父は溝口半左衛門と号し柴田勝家の臣なり大隅始め半之丞と呼て伊賀守勝豊に屬し十六歳の初陣ゆへ越前白鬼女の大功を顕し名を權兵衛と更賜ひ後の朝鮮永正に仕て大隅と唱へ朝鮮後度の戰に主人幸長に從ひ清正と俱に蔚山城籠城日数を尽るとのへども屈せず遂に明軍百万の圍を破敵將六人の首を得て加禄二千石を賜ふ
寿亭春人紀
八十六
朝霧楼芳光画
廣重

太平記英勇傳

安藝中納言照基

大江廣元の十七世孫武部十郎基成
始め吉田三百貫より出武田三村
御尼子と七しく十國を領を
長子隆基早世—其を
其子照基家藏を継ぐ
武略祖父基成より
劣を始め永録八年
基成大挙しく
出雲ゑ入り富田
の城を責んとを
時ゑ照基菊川元長と
爭ひて富田を攻んと謀
基成在踊—子実り
吾孫ゑりとのゝ累年
秀吉と成行—四ケ國合領
—て百万余石を喰ゑ
大老の一個ゑり

太平記英勇傳

岸田
光成

近江國の産父を
岸田右門とゑ後隱岐
守為成入道雨斎と号ゑ
光成始左吉とゑ
豊公長濱在
城ゑ時召て扈
從と世しゑり
智を以て
登庸
定川の
後運
上取立
て二万石
の軍役を
勤め四國ゑ使して
軍成ゑ

後五奉行
の一人として治部
少輔と云慶長五年光成軍を起し
敗軍の後江北古橋村ゑて生ゑ

BIBLIOTECA

太平記英勇傳
音川兵部大輔藤孝
三河伊賀守晴貞の實子音川元常養子なり俊子と八故ふ其姓を冒三好松永等將軍義輝を害し合戦覺慶を救ふんとせしと藤孝扶けて逃彼れ走り援ふ信長の援を得て賦軍を誘し足利家と再興ふ孝とのと義昭を奉ふして勢ひ信長り歸ると聴ト
藤孝が諫を聴き職を辞を破て職を失ふ藤孝信長ふ從ひ義昭の助命を請と都と奉ふ子信長亡ぶそ秀吉ふ屬し後入道して幽斎玄旨法印と号せり
信房亭有人紀 十二
朝霧楼芳幾画
太平記英勇傳
明智左馬助光春
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
四十九

太平記英勇傳
佐々木六角兼禎
寿亭有人紀
朝霧楊芳画
十
太平記英勇傳
秋坂中務大輔安治
寿亭有人紀
朝霧楊芳画
九十六

太平記英勇傳
四王天
又兵衛
政明
時に又兵衛
一丈余の大石を
さげ門の扉に打付
微塵にくだくるを
此時十八才とぞ
亭有人紀
朝霞楊芳筆
五十二
太平記英勇傳
直江山城守兼継
長尾家の臣景勝に代て國政を執
勝家成政ホと戦ふ度累月ハども先
考の威名を慕ひ秀吉後主となりて
右府の遺骨を葬るの日兼継主に代て
是を弔ひ後天正十三年秋八月殿下
成政を撃て越中を定め越後の國
糸魚川に陣をる時景勝と謀て
命を拜し翌年五月京に朝し
景勝の参議より兼継ハ朝散太夫
となり其外叙任を待る者五人に及ぶ
亭有人記
一惠齋芳幾筆
六十九

太平記英勇傳
坂井久藏尚恒
太平記英勇傳
石川兵助貞友
山人亭有人記
朝霧楊芳幾筆
三十
四十三

太平記英勇傳
浮田
中納言
秀家
山全亭有人記
一惠齋芳幾筆

太平記英勇傳
小田上總介信長
山全亭有人記
一惠齋芳幾筆

太平記英勇傳
湯浅吾助
九州の出生にして大谷吉隆に仕へ二千石を領す慶長五年の戰ひに主人の令旨にて諸軍に下知を傳へ己れ七百の小勢を以て秀秋が二万余人を打破其他敵陣を撃て突戰敵せしに明友次郎を討死し吉隆と共に自殺せしを介錯して高野へ送り今の心墓とぞ高寅の者を討死せり
寿亭有人紀
廣重
朝霧楼芳幾画
九十四
太平記英勇傳
別所小三郎長治
播州三木の城主なりしが赤城義祐小寺政職と計て義備の猛るを患ひて信長に通ず秀吉中國發向のころ八幡の味方なりし後信長に叛て籠城の色なりしが長治を憑せしに堅固なりしを責んとて秀吉に賂を送りて内ひそかに山路舟路を隱て兵糧の運送を斷ちしかば城兵大に困り竟に人馬草木を食ひ尽て長治今はこれまでなりとて士卒を助命なさんとて伯父山城守友之ホと共に自殺なりしに
寿亭有人紀
廣重
朝霧楼芳幾画
五十八

太平記英勇傳
堀久太郎秀政
山全亭有人記
一惠齋芳
七十七
太平記英勇傳
毛受荘助家照
寿亭有人紀
朝寄楼芳幾画
三十四

太平記英勇傳
武田大膳大夫晴信入道信玄
新羅三郎義光の男刑部三郎甲州武田ふ住て氏を天うの十七代信虎の嫡晴信村上義清を逐て信州を略し彼を為ふ謙信と鋒刃の及ぶ十二年更ふ益と
寺尾亭有人紀
朝霞楼芳虎画
四
太平記英勇傳
坂井右近尚政
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
二十九

太平記英勇傳
嶋左近友之
和州の産
筒井順慶
三家
老の
一個驍勇俱ふ秀ぐり
山崎の役齊藤利次の
奇策をさゆゝ
長刀を奮て利次を
討主を扶て功を立るの
幾于ゝ
其子定次の不行義を諫ゝ
辭して用ゐ樂まんとせゝを
三成良ぶ四万石を食ゝ頃都くふ
二万石を以てもりめゝ竟ふ三成此
拒とゝり濃州大垣ふて
怪物退治をその外
軍功數多ゝ
寿亭亭有人紀
四十
朝霧樓芳幾画
太平記英勇傳
薩摩藤山城入道道三
寿亭亭有人紀
朝霧樓芳幾画
六

太平記英勇傳
加藤
主計頭
清正
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
五十
太平記英勇傳
一惠齋芳幾筆
五十九
林半四郎武俊

太平記英勇傳
堀尾茂助吉晴
在原業平の孫
堀尾忠左衛門の子
幼名仁王丸と号す
尾州岩倉山城の主
勇敢にして敵兵を悉く
討ち山林の名を恥ずも
本多吉晴業山の同道を
拒みたまふ故吉晴怒て
相不申とそなれを
茂助とやーそりゝて
墓にまふり秀吉
ゐられとえくまきりに
賞ー竟の恩と臣とやー
吉晴案内ーく稲葉山を
陥ーまり以来名を
揚ーく功を立てゝ
職千石をゝ
遠州濱松十二万石を領ー
中老の一人なり
寿亭亭有人紀
朝霧橋芳幾画
廣幸
三十二
太平記英勇傳
花田左衛門尉
滋野雪村
安房守昌雪の二男母ハ
宇多下野守の女永禄
十一年戊辰遊信州ゐる
妻ハ大谷吉隆の長女なり
豊公他界の後紀州九度山
村ゐ父昌雪と共に隠遁せ
組紐を業ーて
雪村九度山村の
宅地を一箇所浄刹とゝ
地蔵菩薩を安置ー
庭上に五輪の浮屠を高聳く
大光院日道光白と
号せりとぞ
寿亭亭有人紀
朝霧橋芳幾画
廣幸
八十

太平記英勇傳
山仝亭有人記
一惠齋芳幾
菊川治部大輔元春
藝州山形郡新城の城主
菊川貞常の養子實ハ
元就の二男大江
三家乃一人
為人嚴直
こゝて勝略ゆゑ照元
隆景高松の役に秀吉と和を
敵せと獨り元春不可秀吉志を
得ずにおゝ其下ゑ出るをもゝら
長子元長を嗣らゝて隱居ハ豊公
九州發向のとき西討ハ重吏なるを
元春老うと雖先鋒を命ぜゝて
依て辭もるゆゑ
六十三

太平記英勇傳
會津黄門景勝
信の姉聟長尾越前守政景の
子なりしを謙信養子とし始め
書平治と号ハ是より疾ゑ
謙信北条氏政の事を
叔父子と記
旦名を与て景虎と
命ゝ謙信卒て
後二子國を
爭ハ國人黨を
利て相攻を景虎カ
屈ゝて自殺ゝ景勝
遂ふ家職を継武威
尚先考の如ゝ
天正十四年五月
京師に出て秀吉を謁す
是時參議任ゝ復黄門に昇
進ゝ居を會津に移ゝる
山仝亭有人記
朝霞楼芳幾画
六十八

太平記英勇傳
朝倉左衛門尉義景
原日下部氏世々斯波武衛ニ仕ヘ文明の年中其裔敏景自立シテ越前を領シ始テ諸侯ニ列シ敏代ヲ經テ義景ニいたる性暗弱ゆゑ天下ニ功を立ること能はず會々義昭越前に倚れを辟を謀るに足るとして美濃ニ動座ス信長志を得るにやうゝ朝倉ハ多年の怨讐なるをもつて越前ニ軍馬を發せしに淺井長政旧好を棄て信長と戰ふ時ハ天正元年秋八月義景小谷を援て余吾の湖ニ陣シ戰ひ破て本國に奉て遁ニ京山の城中ニ自害ス
寿亭有人記
朝霞楊芳幾画
二十六
太平記英勇傳
槽屋内膳正政則
山仝亭有人記
一惠齊芳幾筆
五十八

太平記英勇傳

新侶武藏守唯氏

遠く先祖を素うう蒲の冠者範頼の忠臣當麻太郎忠基と云る者源二位ふうく漂か英雄を惜を死を宥めくく薩戸海うう流せ一の子品津家ゐ仕え年を經る爰四百余年世を遁る事十三代意ゐ唯氏ゐ至る古今獨歩の強勇ひ一く常ゐ廿八人目の鎧の延棒をいく敵中を竪横せう豊公九州を一統做といくらも獨り唯氏服従せん事を勢二十を卒一くその帰路を討んと豊公大勝をうくを感ゐて大隅の内一郡をうるひしとそん

BIBLIOTECA

太平記英勇傳

八菅與六正勝

新波屋敷守高綱の後裔世に海部郡八菅村ゐ住と豊公初雅うひしゑ正勝の家に代々若先ゑ出ゐ相をもう敵人と約一其身信長に事く正勝を召うひ以下今川を奪取を攻尚四国貴に功ひうを以く

▲阿波一國をゆひて十七万石余を食うう

太平記英勇傳
楠七郎左衛門正具
楠延尉正成の遠孫北畠具教の麾下にして武勇兼備せり
先祖と義光を信長伊勢に軍馬を発し諸持ふを奪ひ戦ひの利を失ひしを正具及間を以て信玄尾及び戦ふと云せしの冬に軍中騒動信長帥を復て其謀言ありを知り後再度発向して諸城を陷せ獨正具謀略をもつて屢々破り信長伊勢を平定及び辞して本願寺に入る
山仝亭有人記
一惠齊芳幾筆
九十一
太平記英勇傳
清水長左衛門宗治
邪家無類の忠臣なり秀吉備中に入て高松を圍と遂に上堤を築き兄部血水大堰の三川を堰入れ時しも皐月の季なるりのうち水八さえく岳をひたし城中力屈して唯水屑となるんのを歎めて宗治自害して士卒を助命せんと使者をして言入るに秀吉是を許て堰尾吉晴を撿使とせり宗治最期の一曲を奏一首を詠て
山仝亭有人記
一惠齊芳幾筆
九十一

太平記英勇傳
齋藤伊豆守利三
山仝亭有人記
惠齋芳幾筆
六十一
太平記英勇傳
中川瀬兵衛清秀
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
十七
中川瀬兵衛清秀
和田伊賀守

太平記英勇傳
齋藤竜奥
山全亭有人記
一惠齋芳幾筆
九
太平記英勇傳
伊木半七
山全亭有人紀
一惠齋芳幾画

太平記英勇傳
今川治部大輔義元
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
三
太平記英勇傳
左枝
犬喜代
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
三十三

太平記英勇傳
荒木摂津守村重
村重ハ公方の御味方とし〜て武勇世に
許さ〜れ特に公方信長に被
大津瀬田ふ砦を築き〜を信長
光秀長秀ホとし〜て是を討せ自ら上各
志ゆふの時村重藤孝と倶ふ逢坂ふ出迎へ
請て摂津守さ〜んと信長佩かう
饗宴を貪り村重ハ自先ふ出を
と悠然として是を食を信長その
膳力を賞し〜摂津守さハうぞう
寿亭亭有人紀
朝霧橋芳幾画
廣重
三十八
太平記英勇傳
庭五郎左衛門
長秀
秀吉実徳
上ふ出と
量と車
及信雄と
秀意中に
と斜さん
暁蔵自由を
寿亭亭有人紀
朝霧橋芳幾画
廣重
七十
時に五十一歳

山金亭有人記
一惠齋芳幾
真柄十郎左衛門
直澄
太平記英勇傳
越前乃國主朝倉の勇臣なり其父虚弱の性なるを以て天に祈て大力の男子を授ぬるよう願ひ黒ゑ直澄を産り怪力百餘人を對し同國千代鶴則綱の銘ある九尺五寸に幅四寸重子一寸四分十八ヶ目の大太刀を振ひ向所不勝と云事なく彼堀川の一戦に碎き勇将誉田が為めに討死せり
太平記英勇傳
平手監物
平手中務の嫡子二世相模守と云ん
織田の軍師なり秀吉日ごとに登庸して自己の右に出んを
怨ず一柴田佐久間に諸く
陣列調練を号し木下が
威をとり一うんを信長
評して豆に兵士五百
ばかりにて平手木下
られに將とし一齊場へ
ひく〳〵調練をすに諸撃
らるに秀吉あるべ
平手ちゝ先く木下が
凡そうさるそもろめ〳〵
意を設して藤吉ふ職捷を
嗚呼ひとつく改むるにもろ
もろの先言にあられることを
山金亭有人記
朝霧楊芳幾画
廣重
二十二
八十三
廣志

太平記英勇傳
古早川
左衛門督隆景
大江元就の三男なり
安藝の國沼田の城主古早川
正平の養子なり
弘治元年歳
島の合戦に
陶が勇将弘中三河守
を討其り尼子大友の
戦ひ屢く利あり
武勇のほまれ
毛利の良将なり公が豊公なり
徳川西討ふ功有を以て筑前を賜ふ
後朝鮮の役ふ明軍を破る度数度就中
南大門の後備へ歓味方の職を覚さるう
弄月亭有人紀
朝霧楼芳幾画
廣華
六十二

太平記英勇傳
蒲生
宰相
氏郷
江州日野の城主
蒲生定秀の嫡子
賢秀の子なり父賢秀の
信長に屈せ一旦は忠三郎と
称て十三才なりしが信長その
勇を愛して視て聟とせ
果して贈官倶ふ
抽擢軍忠尚沢なる
かるが故に州松坂に十二万
石を領せ後天正
十八年秀吉の供奉
して奥州に赴き会津
四十二石を賜ふ山崎右京
亦が秘詞をめぐるふ
氏郷が
武の業さう
とて久しき
弄月亭有人紀
朝霧楼芳幾画
廣華
八十四

太平記英勇傳
片桐東市正且元
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
七十五
太平記英勇傳
上杉不議院謙信
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
五

太平記英勇傳
小西摂津守
行長
寿亭有人紀
朝霧楼芳幾画
八十八
太平記英勇傳
磯野
丹波守
定正
寿亭有人紀
朝霧楼芳幾画
二十八

太平記英勇傳

尼子四郎 勝久

武部少輔政久の男僧となりて泉州堺に在りしを山中鹿之助岸左馬助等ふ進ぜ給しを四郎勝久と名号寺本立原亀井ホの舊臣を集め雲州に入り三沢三部屋の國人を從(但馬)うり因幡ふ入山名を味方と屋運元と戰(さとり利なくして播州に走り秀吉に誠ひ上月ふ籠り郡三家と快戰なせと衛計爲に尽くして勝久自害ちく士卒を助命給ふ

太平記英勇傳

長曾我部宮内少輔元親

祖父元秀の一條前亞相房家の七家老の首頭なり天正年中故作て謀叛を企て房家の孫國親を撫育し成長して首領を悉く殺し國親復兵を挙て半途にして病死せり元親年始て十八父の志を継く屢く六族を亡ぼし四辺を攻掠して底を國中にあるに王命ふ應せさる事年あり天正十三年秀吉自己兵十万に將とし諸將を阿豫讃の三州ふ出せ給ふ元親力尽て自殺なさんとせしを秀吉その勇を惜を助命して土佐一國をとらす

太平記英勇傳
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
木村又藏正國
八十一
太平記英勇傳
山仝亭有人記
一惠齋芳幾筆
森本儀太夫
八十九

太平記英勇傳
佐久間玄蕃盛政
山全亭有人記
一惠齋芳幾筆
二十一

太平記英勇傳
山路將監滿國
寿亭有人記
一惠齋芳幾画
五十

J-C
7

J-C
7